



浜田知明《階段を上がる人》1986年

ことば 115

是が非でも訴えたいものだけを画面に残し、他の一切を切り捨てた

浜田 知明

桐生曼荼羅—人物篇

田中 淳

はじめまして、田中淳と申します。美術館ニュース『ガス燈』のこの欄は、代々館長さんが担当するとのことで、はじめて書かせていただく。

8月1日に赴任してから、一か月あまりかけて、市内外の関係者の方々に挨拶してお目にかかった。関係者といっても、頂戴した名刺の肩書が、理事長、会長、社長等々、えらい方々ばかりでしたが。とはいえ、美術館創設者大川栄二（1924-2008）の訾咳に接してこられた方々であればこそ、いずれも美術館のこと、桐生のことを熱く語っていらっしゃった。また、その間には、地元紙のインタビューも受けた。そうした折に、わたしは、これからは「桐生の地にふさわしい美術館」を目指したいなどと、不遜なことを申し上げてしまった。桐生と近代美術といえば、抽象画家のオノサトシノブ（1912-1986）の出身地であり、同時に生涯にわたる創作の地だったことがおもしろい。それ以上は、この地のことは、まったく知らずにやってきてしまった。そこで、この欄の初回は、この一か月余りの間にわたしが出会ったお二方を通じて、桐生と近代の美術、もしくは文化に名をとどめた人々についてスケッチしてみたい。

山鹿英助さん

今年7月だったろうか、東京上野で会った86歳になられる明治美術学会の会長青木茂翁に、わたしが桐生に行きますと報告したところ、青木先生は「テッポウヤさんのヤマガさんに会うといいよ」とおっしゃった。昔の桐生のことならば、何でも知っているから、というのが唯一の「はなむけの言葉」だった。確かにそうだった、今から20年、いや30年前になるだろうか、市内の旧家の蔵から、島霞谷（1827-1870）、島隆（1823-1899）夫妻の遺品の数々が発見されたこと聞いたのは。蔵からは、古文書とともに、油彩画、写真、撮影機材、金属活字等々



ラゲザ玉《浅間山》制作年不詳（個人蔵）

がつぎつぎと出てきたという。当時、近代の美術史の研究者たちの間では、「幕末のタイムカプセル」といって、ちょっと騒ぎになったことを覚えている。桐生は、その「島隆」の生誕の地であり、霞谷亡き後、故郷にもどって夫から習った写真術をつかっていたであろう、その終焉の地でもあった。これらの資料を発見して、内容の貴重さに気づき、東京の研究者たちを導いたのがヤマガさんであった。そこで、赴任早々、美術館のスタッフに「テッポウヤのヤマガさん」についてたずねたところ、その人ならば、館内を清掃してくれているヤマガさんのご主人だと教えられた。この美術館では、毎朝二人の老婦人が元気よく館内をくまなく清掃してくれている。お二人とも、開館以来つづけているというから、三十年近くになるだろう、たいへんお元気だ。そのうちのお一人が山鹿さんで、山鹿銃砲店の奥様だった。お店におたずねして、ご主人である山鹿英助さんに会えば、待ってましたといわんばかりに、いろいろな話が飛び出してくる。話が尽きない。島霞谷、隆だけでなく、実は、ここから10キロほど山の方には、山下りんではないけれども、古いキリスト教の聖像の油彩画があるから、見に行こうとおっしゃる。お店は銃砲店だから、やってくるお客さんはいずれも免許をもったハンター達である。ところで世界各地に、珍しい草花を採取する人をフラワー・ハンターという。さしずめ山鹿さんは、桐生のカルチャー・ハンターということだろうか。

奈良彰一さん

話がつきない人ということであれば、もうおひとり奈良彰一さんという方も出色である。大川美術館の「友の会」では古参であり、市内で古書、美術品の店を営む奈良さんにお目にかかった。あいさつ代わりにいただいた本は、黒川真道著『黒川真頼伝』の復刻本であった。黒川真頼（1829-1906）は、もとより桐生生まれ、明治になって皇室博物館、東京美術学校に出仕した歌人で、国文学、考古学者であった。当方が、上野の博物館の近所からやってきたということでのプレゼントであった、もう一冊は、やはり奈良さんがつくられた『安吾と桐生』という本であった。小説家坂口安吾（1906-1955）が、戦後、桐生に移り住み、ここで亡くなったことは知っていたが、奈良さんの名刺には、いくつかの肩書が書かれていて、一番上に「安吾を語る会代表」となっていた。安吾のことを話し出すと、これもまた尽きることがない。そうした奈良さんを、すぐ後に町中でお見掛けすることになった。それは、8月初めの桐生まつりであった。どこからこれだけの人が来たのだろうかとおどろいた。いつも人気がないとおもっていた本町通りに人があふれていた。熱狂的な八木節の踊りの輪と、それとは対照的に静かな祇園祭の鉦の巡行を同時に見物した。鉦の巡行では、そろいの祭りの浴衣を着た奈良さんが、先頭にたってマイクをもって祭りの歴史や鉦の特徴などを流れるように解説していた。奈良さんの名刺の上から二番目には「祇園研究会主宰」となっていたから、これも納得した次第である。



左：大川栄二元館長 右：新井淳一先生

この桐生にやってきて、山鹿さん、奈良さんのほかに、実にいろいろな方々にお目にかかっている。ただひとつ残念なのは、国内外で著名なテキスタイル・プランナーで、大川栄二とも親しかった新井淳一さんが、9月25日に85歳で急逝されたことだ。二度ほどお目にかかり、すこしお話をうかがっただけで、これからいろいろと教えていただこうという矢先のご逝去だったので言葉もない。ご冥福をお祈りします。しかし、まだまだいらっしゃる。年末には桐生に転居されるという写真家の石内都さん、9月に「桐生市芸術大使任命式、記念講演会」がとりおこなわれて、「芸術大使」となったアーティストの山口晃さん等々、そして大川美術館をめぐる多くの人たちと、これからお会いできるのが楽しみである。（僭越ながら、大川美術館を中心にした桐生の多士済済の人物図のようなことをおもい描いているうちに、主尊を中心にして諸仏が配された華麗で奥深い曼荼羅を連想して今回のような題名にしてしまった。これからどうぞよろしくをお願いします。）

（大川美術館館長）



桐生祇園祭り鉦の曳き違い

企画展のご案内

浜田知明1917年生まれ。秀島由己男1934年生まれ。ともに熊本出身の作家であり、現在も熊本の地で制作を続けています。ふたりは、戦争体験、公害問題、核問題、地震、・・・といった時代の大きなうねりのなかに身をさらし、自身の表現を静かに探り続けてきました。たがいに銅版画に独自の表現世界を見出した二人の作家の「版画」を再見します。



浜田知明《初年兵哀歌（銃架のかげ）》
1951年 エッチング・アルシュ紙

浜田知明、秀島由己男は、大川栄二（1924-2008）生前に親交のあったアーティストです。大川は、浜田について「人間ドラマ的一幕として理解し、人生を慈しむがゆえの冷徹なる人間観察の表出として浜田芸術を見てもらいたい」、秀島について「何か人間の歓びや哀しみの絶叫を静かに浄化させつつ、心にしみ込むような余韻を持たず世界」といっています。



秀島由己男《詩画集「静物考」より
1.paper balloon》1985年 メゾチント・紙

作家の人柄にも惚れ込み収集したコレクター大川栄二と同時代を生きた浜田知明、秀島由己男。コレクターとアーティスト、生きた風土は異なれども、その時代の空気を敏感に察知してきた者どうしの共鳴があったのかもしれませんが。大川は両作家の作品を積極的に収集し、現在当館には浜田作品約50点、秀島作品約60点が収蔵されています。本展ではこれらの作品を一挙展示します。

大川美術館は2019年に開館30周年を迎えます。当館の原点を見つめなおすプレ記念事業のひとつとして本展を開催いたします。



浜田、秀島両先生から、本展に向けてメッセージを頂戴しました。
展示室でも紹介しています。

●同時開催

修復報告展示

『清水登之、再発見の「育夫像」』

画家・清水登之（1887-1945）の長男・育夫は、上智大学を卒業ののち1943年に入営し、1944年海軍少尉に任官しました。軍艦「金剛」の乗組員として前線にむかい、そして台湾沖にて戦死します。この報を翌1945年6月、海軍省より伝えられた清水は直ちに絵筆をとり『育夫像』を描き、祭壇に納めるのでした。

父・清水が、掴もうともつかめないが、それでもなお描かないではいられなかったという悲痛さが伝わってくるようです。しかし同年12月、強度の精神疲労と病により清水は息子の後を追うようにして逝去します。

このたび、大川美術館に収蔵される《育夫像》4点の修復が完了いたしましたのでここに紹介いたします。



清水登之《育夫像》1945年



展示室内の様子

【忙中閑あり】

最後の花

春に、とあるメンバーシップの方から夕顔の苗を三株いただいた。

朝顔は西洋朝顔から宿根朝顔までいろいろな種類の朝顔を店で見かけるが夕顔はみたことがなかったので、今まで売っているのに気がついたことがないと申し上げたら、「店頭にならぶことはあまりないでしょう。入手するのは結構難しいです」とおっしゃっていた。

貴重な三株である。

夕顔は陽当たりも大切に、美術館の庭園のなかでも特に陽当たりの良い場所を選んで置いた。うまく育つかドキドキであったが、三株の夕顔は順調に育ち、やがて見事な花を咲かせてくれた。大人の手のひら大の真っ白な美しい花を。8月の最盛期には一日に30もの花が咲いていた。実に見事。

しかしながら美術館を訪れるお客様のなかで、この花に気づいた方はそういらっしやらないのではないかと思う。なにせ、夕顔なので夕方4時頃から花が開き始めるので。

そして徐々に花の数が減っていき昨日は5つ今日は4つとなっていた9月のある日のこと。台風が通過しそうだということで台風に備え準備作業をしていた時、夕顔の花が咲いているのに気がついた。一つだけ。

「最後の花だ…」と思った。それなのにこの花はこれから台風の雨風にもまれるのである。写真を撮ろうと思ったが、手近にカメラはなく、後で来ようと思っているうちに忘れてしまった。

翌日、しおれている花をみて、写真を撮り忘れたことを後悔したが、今は撮り忘れてよかったのかもと思っている。あの最後に咲いていた花の様子を、あの日の台風のこと、雲のことや、雨のこと、台風に備えて準備していた時に同僚とかわした会話ともども忘れることはないと思う。写真に撮っていたら、撮ったことで安心して、あげく写真を撮ったことさえ忘れてしまったかもしれない。（井上）



野望：この種で来年も咲かせてみたい。

回 大川美術館活動の記録

7. 8 友の会サマーパーティー
「フルーツデュオコンサート」
フルーティスト：荒井 美幸氏
小林 歩氏

(当館)



サマーパーティーにて
フルーティスト：荒井美幸氏・小林 歩氏

- 12 桐生市立中央中学校へ出張授業
13 桐生第一高等学校 生徒来館
〳 アーツ前橋へ
バプロ・ピカソ 作品貸し出し
15 府中市美樹館より
ベン・シャーン作品返却
21 友の会ワークショップ
～25 「模写の会」 (当館)



模写の会



講演会「無限の人間愛」と「孤独の美」
講師：田中 淳(当館館長)

8. 5 桐生タイムス 取材
9. 1 ファッションタウン桐生推進協議会
生活文化委員会 当館にて
13 桐生市立中央中学校2年生 職場体験
〳 桐生市立桜木中学校2年生 〳 (当館)
14 桐生市立桜木中学校2年生 職場体験 (当館)
23 作品評価会
10. 4 桐生市立梅田中学校1年生 事前授業
6 アーツ前橋より
バプロ・ピカソ作品返却
9 作品収集委員会
13 桐生市立梅田中学校 1年生 来館
14 講演会
『「無限の人間愛」と「孤独の美」
-浜田知明と秀島由己男の作品』
講師：田中 淳(当館館長)
17 平成29年度 第4回 理事会 (当館)
18 加山又造巡回展より作品返却
〳 桐生市立黒保根中学校3年生 来館



電動バスMAYU(まゆ号)で 黒保根中学校の3年生のみなさん